

## 編集後記

(曲水7-8)

○ 「水巴句帖の会」が果て、夜風の露台の卓を四五人囲んだ時、先生から、「大変遅れたが、曲水句帖は今夜清書を済まして明日は印刷所へ廻す。十七頁までだから、後は、あなたの手許の原稿を纏めて廻してくれ」と、言はれた。自分は翌日纏めてしまふつもりでゐた。

○ 翌る日は、「水巴句帖の会」の盛会を偲ふてつかうか／＼と過してしまった。夜、郷里の父が上京して来た。兄弟三人の自炊で、弟が一人休暇で帰国した後なので、かなり面喰った。二十日の夜更け、家の前に車の止まる気配に出て見ると、摩山水君が吟社からの帰路、残りの原稿と先生の手紙を持って寄ってくれたのだ。摩山水君は神経痛で息も出来ないと蒼い顔をしてゐた。自分は大変すまなく思った。

○ この春以来患ひがちの胃腸がまた悪くなりだした。加ふるに齒痛で頬や顎が順々に醜く脹出した。その間々に、絵をやる友人が来て、肖像を始めたので、時々坐らせられた。

○ 月初めに約束して、月末までに纏める筈の自分の仕事は、まだ半分しか出来ない自分は、いろ／＼考へて、暑い日中をぼんやりしてしまった。今月の遅刊は罪自分にある。(七月廿九日)

## 編集後記「いろいろな事」

(海国少年10-6)

○ 本号が六月号ですから、昨年本誌が復活してから丁度これ一年になります。この時に當って満天下愛読者諸君に深い感謝を捧げたく存じます。しかし物事は得て繰返され勝ちのもので。本誌にも亦どんな変化が来、まいとも解りません。けれども私達はその都度必ず読者諸君の御満足を得ますやう全身の努力を致します決心でありますことを、今後とも何卒御記憶下さいませ。

○ 本号の海国少年団生駒便乗旅行記は、あの旅行に本社からは誰も参加しませんでしたから、従って本誌記者の手でなく、少年団の方の何誰かの手になったものであります。

○ 近頃本法に冒險的の読物が少なくなったといふやうなお手紙を寄せられる方が折々ありますが、それは、よし地味であっても確かり落ついた読物の中に、諸君のほんたうの心持にぴたり合ふものがあると深く信じました私達の考へからでございます。何卒大袈裟なばかりで空虚な読物を棄て、落ちついた健全な読物をお撮り下さい。この中にほんとうの勇ましさも、雄々しさもある筈でございます。じつと御覧下さい、牡丹の花の美しさも、小さな一本の草花の美しさも、結局変りはないではありませんか。いや、私達の心持は却って、名もない草花の一つに牽かれさへ致します。(順風)